

### 論語で主体性を そして勁さを

「憤せずんば啓せず悱せずんば発せず。」

一隅を挙ぐるに、三隅を以て反さざれば、

則ち復びせざるなり」

不悱不発。拳一隅、不以下三隅反則不復也。」

孔子いう、何とかが解りたい気持ち湧き起らないければ教えないよ。言葉にしてうまく言えず、いらだつくくらいでなければ教えないよ。物事の一つの隅をとりあげ示すと、あとの三つの隅は自ら考え反応するくらいでなければ重ねて教えないよ、と。

弟子に自ら学び考え判断・表現し解決する主体性を求めています。前回拙い乍ら述べた自己評価改善力も主体性に拘わるものですがここでは直に弟子に示しています。

このように、論語は、仁愛の情の温もりや恕の思いやりなどと共に、主体的な勁い人間育成を目指しています。押し付けの教育で受身の人間を育成するのではなく、まさに学ぶ側の自発の意欲と態度、能動を期待する「啓発教育」なのです。(因みにこの章句は啓発の語源です)

前半の文は、まさに解決に向かって求める気持ち・情熱が盛り上がりたてと教えないと主体性を求めています。後半の文は、一隅の基礎基本を学んだなら後の三隅は自ら課題・条件を見つけ自ら考え解決し、その解が適切か評価する意欲と態度、主体を求めています。更に、

「力足らざる者は中道にして廃す。今

女は画れり」

孔子いう、**〈本〉**に力が足りない者は、途中で力尽きてしまふ。が、お前は、最初から自分の力に見限りをつけてやるつもりでいな、と。

主体的に困難や問題に立ち向かうよう励ましているのです。言い換えると、精神的な勁さも期待しています。

私は、社会に出て、仕事上の問題を解決する力を持ちたいと切に思ったことが多々ありました。ノウハウ本も数多く開きました。が、ふっと思い出したことがあります。数学の問題を解く時、問題のパターンを記憶して解決する方法では限界があることです。それは、思考力等能力を身に付けていなければ、初めて出会う問題解決に時間がかかり過ぎたり、何をどう進めていけばいいのかわからないことです。そこで、気づいたことがあります。

それは、自らの知識と自らの能力を駆使し、間違っても自分の考え、推論を持つことを繰り返して鍛錬することです。この壁を乗り越えることが、前回述べた思考力評価力を身に付け主体性を伸ばす「本」だと感じました。

教師になり出会った子供は、初めて出会う問題(既習からできるはず)を解こうとしないのです。先輩の先生

方の導きでその壁を乗り越える授業をすると、みるみる子供が伸びたことを思い出します。主体性以てその壁を突破することで、拡散思考力・集中思考力・評価力は少しずつでも鍛錬され伸びていくものだと気づきました。これは、二〇〇六年アジア太平洋経済協力機構(APEC)の算数・数学教育国際会議が日本で開催された時、基調講演された元文部省(当時)片桐重勇氏より示された数学的な考え方そのものでもありました。永年転任する毎学校に来訪いただき啓発していただいた内容です。又試行錯誤しながらも自力で主体的に解決できれば、それは楽しさになることも知りました。

「之を知る者は、之を好む者に如かず。之を好む者は、之を楽しむ者に如かず」

「知れざる、不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>之者。好<sub>レ</sub>之者、不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>樂<sub>レ</sub>之者」

問題解決できる楽しさと、自分や人、社会のために活かし役立つ楽しさになるのではないのでしょうか。結局

「君子は諸を己に求む。小人は諸を人に

求む」

転ばぬ先の杖を与えられ続けるのではなく、基礎基本を学んだら、自ら主体的に諸問題を解決していかうとする意欲と態度で能力は更に伸びると考えます。自分ができるいのを人のせいにするのではなく、まずは、自分で学び考える小さな鍛錬の積み重ねが自立した主体性を伸ばし勁い自分をつくるのではないのでしょうか。その上で他に求めることだと考えます。又「君子は〜」「小人は〜」と決して押し付けではなく読者に状況等による選択を任せ主体性を期待しています。更に、

「天何をか言はんや。四時行はれ、百物

生ず」

(孔子が弟子に「もう何も言うまいと思つ」と言うと、弟子の子貢(しこう)は、驚いて「それでは学ぶことができませぬ」と言った。すると、孔子は言った)

〈天(自然)は何が言つか。何も言わないではないか。しかも春夏秋冬はたゆみなく運行し、鳥獸草木等の百物はしっかり生を遂げているではないか。と。

つまり、言葉で教えてもらうことだけが学びではなく、自然現象などの法則性、理を自ら見つけそれを自らの学や生活、業に活かすことも大切なことだ、と説いたので。人間は、季節の理に気づき春に種を播き根を育てると夏には大きく育ち秋には実を収穫できることを活かし狩猟生活から農耕生活に変革できたと考えます。生涯学習時代の今、生き方道の理を道徳や論語で、読解・表現の理を国語英語で、量や事・物の関係の理を算数数学で、自然の理を理科で、社会や土地の理を社会科で学び直し見つけ、幸せな社会実現に活用していきたいものです。